

天地經

卷之一

特42  
538

014413-000-2

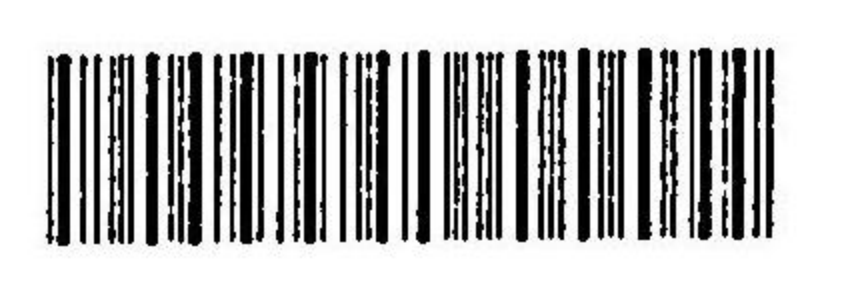
特42-538

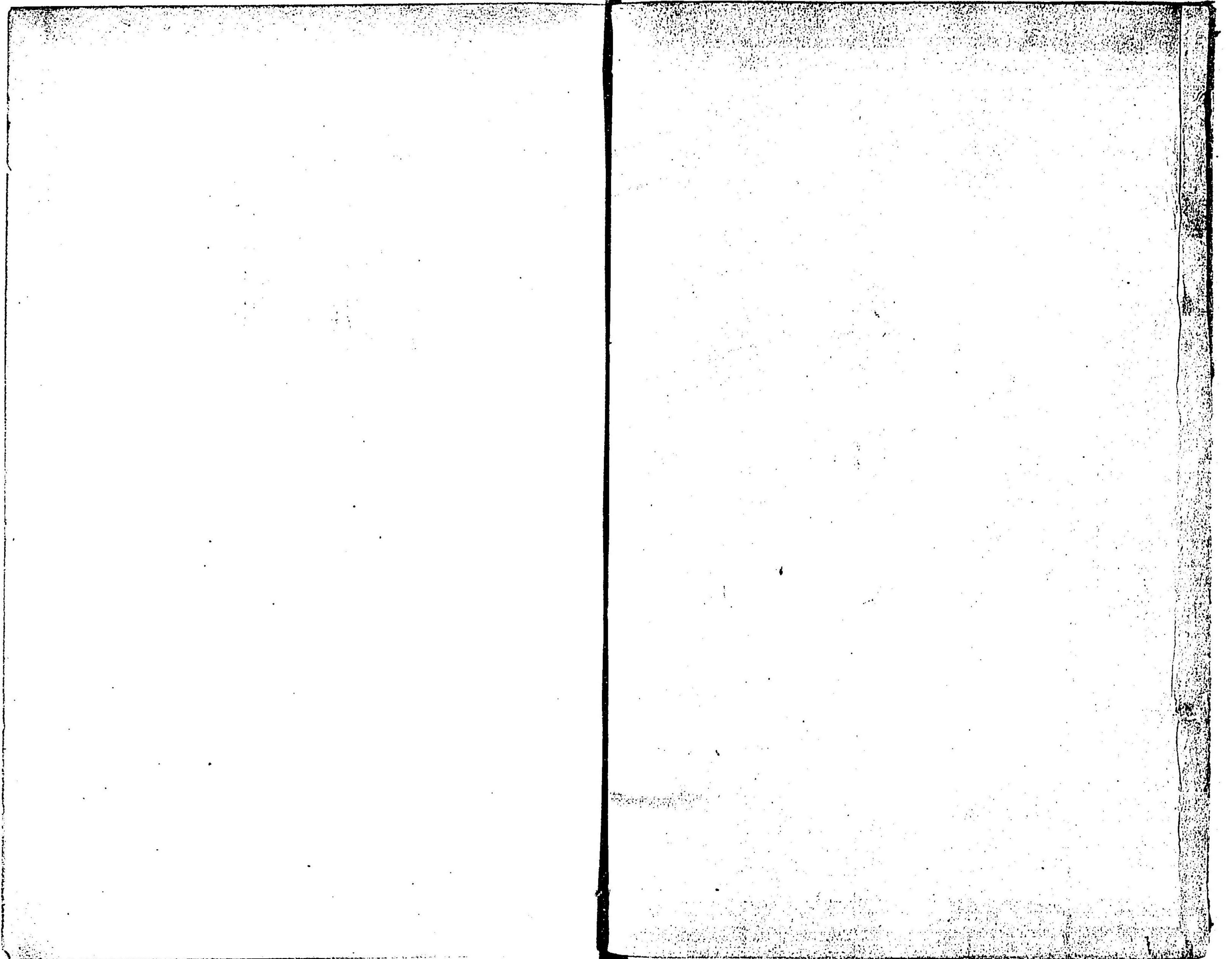
天地經 卷之1

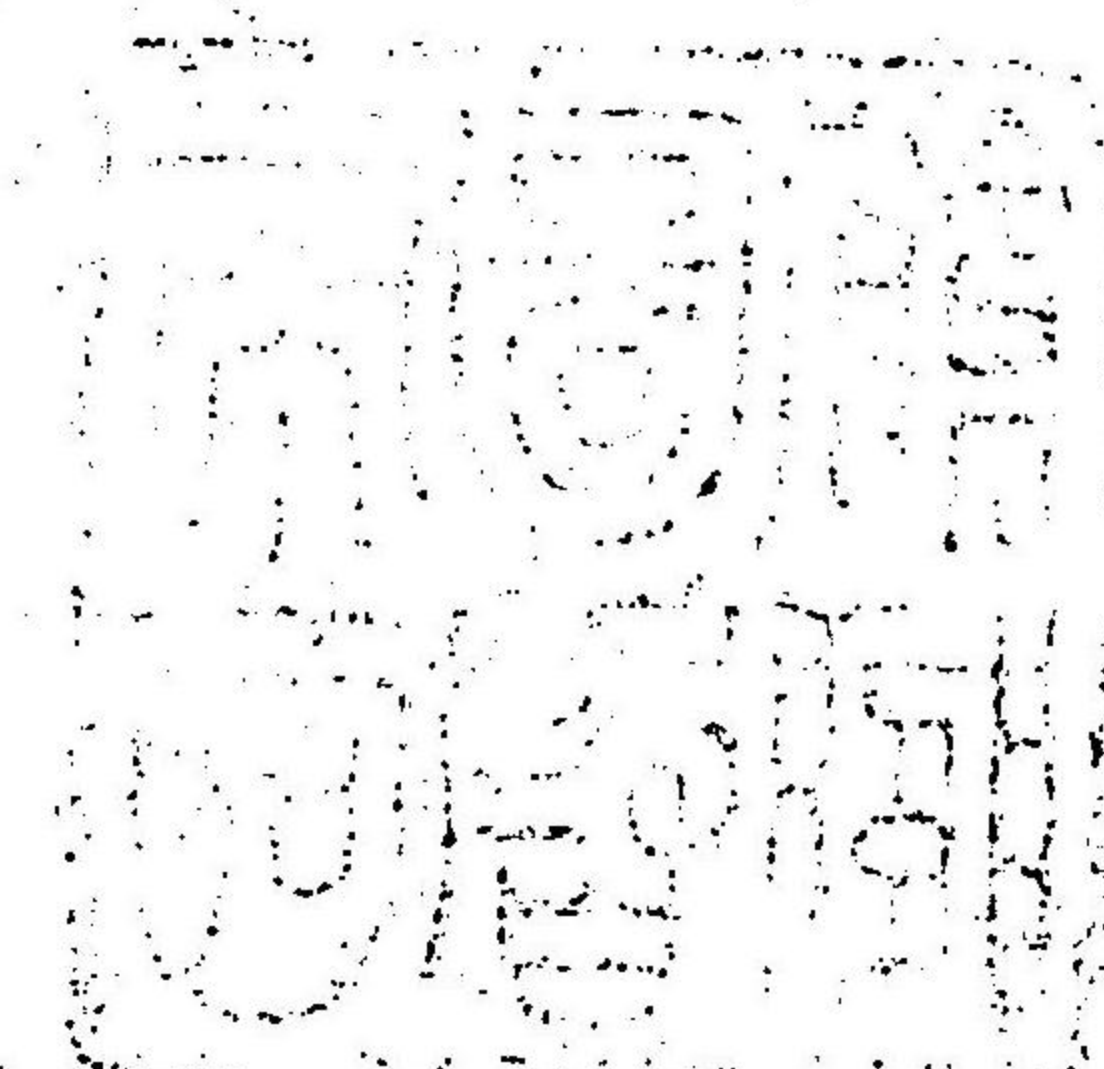
天地大教本部 / 編

M31

ABB-0783







宣布大教之詔

朕恭惟天神天祖立極垂統列皇相承繼之  
 述之祭政一致億兆同心治教明于上風俗  
 美于下而中世以降時有汚隆道有顯晦矣  
 命也天運循環百度維新宜明治教以宣揚  
 惟神之大道也因新命宣教使布教天下汝  
 群臣衆庶其體斯旨

御名 御璽



清鏡詠

すめらさの御祖の道は

天地の神の教の

本にぞありける

天地經緒言

馬に御して乗馬の道知らねば落馬の憂あり  
船に乗りて泳ぎの道知らねば溺死の恐あり  
井を堀るに水道を知らねば勞して功無し  
琴瑟を弾じて糸道を知らねば人の嘲りを  
招くのみ人として人の踏み行ふべき道を知  
らねば遂には罪の穴に落ち入りなんをを罪  
穴に落さじと懇よ手を携へて平地の大道に  
案内するを教とは云ふありされど若し偽  
りの教の案内者ありせば恰も惡車夫が挽け

る車に乗りて案内を求むるが如く横道に連  
れ行かれて或は懐中の寶物をも掠められ或  
は谷よも放たれなむ嗚呼又危きかも之れ實  
に教の緊切なる所以あり清鏡未だ若年且つ  
不學短才にして重き神教の職を汚すの器に  
はあらねとも今や世の教の形勢を觀るに宛  
然かゝる惡車夫にも髣髴たる教の多あるを  
憂ひ沐浴以て身を清め齋戒以て心を齋め一  
身を神教の犠牲と爲し或は絶食或は木食  
或は山中に籠りて不敏の身命を惜まず天

地神明に捧げて誓を立て救世の道を求めて  
日夜怠らず其の間人に説き示せし事どもを  
門下の數多物したる内の一部分を文學のえ  
すゝまぬ老若男女の人々にも專ら解り易か  
れと丁寧に記して卷に著したるは是れが此  
の文ある計費の足らぬが爲め小冊あるは最  
を口惜けれと漸次卷を加ふる營みあれば苟  
も神國の日本人たらむ御方々は先づ讀み  
見て畏くも皇祖皇宗の立させ賜へる國教  
に歸依遊さるれば清鏡が幸甚之れに過ぐる

ものあし聊か述べて緒言よ代ふ明治三十年  
二月二日前羽清鏡記

天地經といへる書をよみて

少教正宮城雲洞

さく花のにはへるがごと

斯道のひらくる時に

あはまくはし

# 天地大神の靈德

天地の大神とは天之御中主神を始め奉り天地の間にありと  
 あらゆる八百萬の神力の御總稱と心得べし又諸儒諸佛も皆  
 籠れりと思ふべし紙數限りあれば後日曲に解き示さむ

天地大神とは神典に天地初發之時於高天原成神名天之御中主神と  
 ある大神にして寶山記に天之御中主神無宗無上而獨能化云々  
 とある如く實に至尊無上無二無終にて万能具足の奇々妙々たる御  
 爲所を以て天を造りて日月の都を構ひ光りと熱とを百千萬の世界  
 に施し大地を設けて萬物を生々しく其の造り賜ひし日月の光萬物の  
 生を保たむ爲めに日神月神八百萬の神々を産靈成し賜ひて各々  
 徳の随々受け持たしめ規律整然未だ曾て其の作用を誤りし事なく  
 靈氣天地に充ち満ちて生々愛育を大本願となさせ賜へりあな尊ふ  
 と

あやしきもこれの天地うべなく

神代もことにあやしくありけむ

抑日輪は一つのみ愚にも思ひしかと駭々乎として文運開け人の  
 智識もいよゝ明晰なる今日に至りて天文地文物理など云ふ學びの  
 道盛んに廣がり愚なる身も其の半片を窺ひ見れば日輪の数の幾百  
 萬なるを知らず地球もまた同じ幼少の時親に教へられて天の川と  
 唱ひ拜みし川も實は川ならで恒星の數多集り重りてかく見ゆるも  
 のにて其の星凡そ日輪に等しく五行の星と稱して五つのみと承知  
 せしも今や八九有餘の多きを見顯し此の地球も一の遊星にして他  
 の地球より見れば星に見ゆるとぞ嗚呼奇なるかも大なるかも翻て  
 地球上を見れば空氣ありて動植物の生を守り數十有餘の元素なる  
 ものありて五十音の一とつ一とつを組み合せて言語を成すが如く  
 各々化交して禽獸虫魚草木に至る迄生々養育し其の細微の虫にも  
 口あり臟腑あり手あり足あり節あり呼吸ありて其の勞働らきを爲  
 すを見れば嗚呼又妙なるかも密なるかもかゝる造化の皆大神の  
 靈徳の御爲所なる事を思へは言葉の形状すべき無く只靈妙不思議  
 の神徳に魂を奪はれ茫然仰ぐのみなり有難きかも我等も此の靈徳

に沐浴せるのみならず萬の物の内の長たる位を賜はり特に懇に  
 守らるゝ事其の近きを云はゞ力を勞する事ありて堪へ難き場合に  
 は牛馬ありて其の勞役を助け心煩悶しく腦中晴れ難き時は緝蠻た  
 る小鳥ありて處得顔に妙音を囀々して慰問の勞を取り又香氣馥郁  
 たる形色美麗の花ありて鬱氣を散ち雨露風塵を凌ぐに屋を構ふる  
 木あり石あり飢を防ぐに食物あり寒を守るに綿あり蠶あり病を癒  
 すに温泉あり藥あり夜を守るに犬あり恙の虫を防ぐに鼠あり鼠の  
 害を止むるに猫あり其の外金銀銅鐵數へ盡し難けれども皆吾等の  
 用具調度の爲めに大神の造りて惠み賜へる物ならざるはなし嗚  
 呼尊きかも畏きかも感喜の涙胸に満ちて言に出す術をも知らず筆  
 を止めぬ他は人々の大神よを賜はりし靈妙なる心を以て推し覺ら  
 れよ穴尊

恩を忘る勿れ

春にして耕作を營まば秋にして收穫の報あり少時に勉むれば老後  
 に顯榮の報あり善を爲さば福の報あり之れ皆天地の神則なりさ



れば恩を受けぬらむには深く心に感銘して之れに報ゆるの志なかるべからず之れを報恩とは云ふなり報恩は百行中の最大なるものにして父母の孝君の忠も歸する處は報恩の一に過ぎざるのみ抑も恩に大小輕重種々あれども先づ最も重く且つ大なるを 天地の神恩となす此の神恩たる語言筆紙の能く盡し得べき處に非らねども今試に其の一端を示さむ餘は心を静めて眼を四方に放ちて事々物々に心を止むれば何も言はれぬ 神恩を自ら感悟せむ夫れ 大神は魂の親天は頭上に在りて吾等を覆ひ地は足下に位して吾等を載せ恰も母の嬰兒を膝に載せ父の頭を撫で、惠むが如し渴して水を求むれば地母之れを與へ凍て暖を欲すれば天父之れに温熱を惠み衣食住に供する米塩草木悉く生々造化して吾等に惠與し 神靈吾等の身邊を圍繞して日夜片時も絶ゆる事なく御擁護を垂させ賜へり

天地の神のめぐみしなかりせば

一日一夜もありえてまじや

思ひ一度茲に至れば轉た感泣に堪へざるのみこれに次ぐ者は天皇の洪恩なり 皇祖皇宗の國を創め賜ひしより世々代々臣民を愛撫し今日に至りて一層の德澤を被ればなり次には肉体の親の養育の恩に委しくするに次には道を傳はり業を授けられし師の恩次に我身の生活を保護せらるゝ主人の恩其の外士農工商衣食住を始め箸一本茶碗一つも食事の用を助けらるゝ恩あれば凡恩と名くるもの枚擧盡し難し此の恩禽獸猶ほ知りて能く報ゆ夫れ猶獺の魚祭鳥の反哺を始めとし 神典を閲すれば太古稻菓の素菟病ありて痛み苦しみを大穴牟遲神の禁厭を被り其病癒じかは太く喜びて必ず神恩に報ひ奉らむと申されしが其の後 大穴牟遲神の百艱を凌ぎて終に 大國主神と成らせ賜ひるは此の素菟の報恩の力關りて功ありしとなり又西洋にも虎の一度病をアンドロクスに助けられしを以て三年の間恩に報ひし事ありしと聞く猶又近き一例を揚ぐれば茨城縣稻敷郡の女化稻荷の白狐は全縣築波郡東栗山村の栗林某なる者に一度の助けを受けし恩にて女人と化して全家に

至り數十年の間一日の如く巍然たる女の節操を守りて家業を刻苦  
 勉勵し豊にもあらぬ其の家をして忽ち裕福の家たらしめ期至りて  
 一通の文を書き遺して身を隠し隠して後も猶長く其の家を冥護し  
 數百年の今日に至るも子孫連綿として彌榮ひに榮ひ書き遺せし文  
 の如きも今に層然保存せり余れも縁ありて其の子孫に深く交り代  
 はして居る事とて遺文の如きは正に實見せり此の事に就きては種々靈妙  
 不思議の傳あるは更なり元  
 來白狐の報恩の志し厚くして仰信せは妙ある驗のある事屢々なるは他にも証例多けれ  
 ど紙數限りもあり人も感ふべかめれば茲には畧く事とはなしぬ後日信仰心の固まりし  
 節は猶委曲に茲に子孫も又其の恩を思ひて數里の遠き道をも厭はず  
 日頃白狐の祠に參詣せられ殊に新年の四日には如何なる大雨大雪  
 の有無に拘らず年賀を勤むるを末代不變の常例とはなせりさてか  
 る例話もありぬるを況して人たる者恩を忘れてあるべきや若し  
 も忘れなば禽獸にもをとりぬべしさはれご魚は水に住んで水の恩  
 を知らず人は天地に住んで 天地の恩を知らずと云ひ提灯を借り  
 し恩を謝して 日月の神恩を謝せせと聞く魚の知らざるは聊か恕

すべし人にありては恕されぬぞかし西諺に曰く人は井の乾くまで  
 水の價を知らずと悲しけれごも信に然なり世の人多くは病まされ  
 ば無病の神恩を知らず富貴なれば富貴の神恩を知らず才知あ  
 れご大神の授け賜ひる魂の神恩なるを知らず文學あれと師の恩  
 なるを知らず親に別れねば親の恩を知らず飢えて窮せねば主人の  
 恩を知らず國亂れねば 君の恩を知らず日月蝕せねば日月の恩を  
 知らず 天地崩れねば 天地の恩を知らざるよ早く 神の教に就  
 きて無量無邊の 天地の神恩を覺り信仰故事以て萬分の一の御恩  
 に報ひ隨て百事百物の恩をも思ひ報ふべきに報ひて禽獸に劣りし  
 人となり賜ふまゝぞ

信仰を忽にする勿れ

信仰は安心立命の源諸善の根元なり臣として君を信仰するの心し  
 なくは不忠の臣たらん子にして親を信仰するの心しなくは不孝の  
 子たらん妻にして夫を信仰するの心しなくは不貞の妻たらん茲に  
 君親夫主を信仰する心厚き時は忠も孝も貞も更に勞なく苦なく勤

むるこも思はず知らず自ら其の道に當るが故に世の忠臣孝子  
 節婦を觀るに皆其の人を信仰するの心至りて深きを思ふへし今其  
 の一例を示さんか見よ我日本の小國にして大國を凌駕しつゝある  
 を之れ國民の國家君上を信仰するの念慮萬國に冠絶たるものある  
 ありて常によく朝旨を守り一端事變の起るに當りては義を富士の  
 山よりも猶重とし死を鴻の毛よりも猶は輕しとし我か私の凡念一  
 つ遣らず爲すともなしに祓ひ清まり君の爲め國の御爲めと勇み  
 立ち命の滅するをも顧みず古はさて置き現に支那の大國を蹂み躪  
 り世界各國の膽をも奪へるか如きは専ら信仰心の爲す處に於ある  
 翻つて支那の如きは如何に國家帝王を信仰するの念至りて薄弱な  
 りければ事に臨んで逡巡踟躕何事をもなし得ずして人類の本分を  
 傷け其の体面を汚し徒に天下の笑を招けるにあらずや是れに依り  
 て思ひ出ぬる事あを仮りに此の社界を人類の戰場と見るべし此の  
 戰場に立つて無二の君上とも稱して頭に載くものは何ものぞ他に  
 ぞなし吾爲す業之れなり此の業を無二の君上と信仰し忠臣二君に

仕ひすと云ふ語を守りて妄りに心を他業に移さず品行を正しくし  
 規律を整ひ神の守護冥助を請ひて東に奔り西に走り拮据經營難艱  
 辛苦も業務の君の爲に打ち忘れ憂ひをも憂とせず忠勤を盡しなば  
 身を立て家を榮えしむるに何の難き事かあるべきや若し吾爲す業  
 を信仰せざる時は忽ち怠惰の念出せし勵みの氣力を失ひ隨て迷心  
 顯れ徒に他人の業を羨み我業を厭ひ右に左に轉業し一生人事を貫  
 き遂ぐる能はずして止みなむ信仰と不信仰との結果以上かくのこ  
 ときを見て凡そ天下の人あらむものは深く鑑みざるべからず抑も  
 信仰は愛心を産むの母にして不信仰は憎心を産むの母なり故に世  
 の人も皆覺えあるが如く已れの信仰せる人の爲めには勞も吝から  
 ず遣ひし時にも自ら愛敬の言葉も出でむ已れの信仰せざる人にあ  
 りては言語を交じゆるも厭はしくを思ふならめ愛は天地の大  
 神の御本性にして悉く愛を以て吾等を恵めり是を以て信仰は大神  
 に向つて盡すを總ての信仰の始めはす故れ先づ神を信仰尊敬し  
 其の心を君に押し及ぼして忠となり親に及ぼして孝となり夫に及

ほして貞となり主人に及ぼして忠實となりなるかよればにや 神に  
敬なる人は必き 君に忠 君に忠なる人は必き親に孝親に孝なる  
人は必き夫に貞主人に忠實なり忠實なる人にして業務に熱心勉勵  
せざる者は余れば未だ曾て聞かざるなり業務に熱心忠實なる人に  
して身を立て家を興さざる者之れ又聞かざるなりこれに由りて之  
れを觀れば神を信仰するは身を全ふするの基礎なること言を俟た  
せ日月と共に明かなるべし且つや我身を觀せよこの身は何處より  
來るかまた何處に向て往くか此の身は何れの處にあるか何により  
て生活するか之れ皆素よき 大神の靈妙なる作用に左右せらるる  
なり

生れぬ先も生れてすめる世も  
しぬるも同じ神のふところ

後の世もこの世も神にまかするや  
おろかなる身のたのみふるらむ  
かゝる我身を一切主宰護持し賜ふ大恩被むる 大神を信仰せずし

て如何にする必ずや不敬不尊の罪とやなりなむ不幸とやなりなむ  
於茲乎いよ、知る我身を主宰護持し賜ふ司命の 大神を尊信せずし  
て家を榮はし身を保ち安心立命せんご欲するも到底得らるへからざ  
るを更に退て我身を熟々鑑みよ此の身の 天地にあるは恰も大藏の  
内の一粒の粟の如し何時疾風の起るに當りて吹き飛さるゝか何時  
大雨降り來りて流されて藻屑となるか何時落雪して身は粉と碎く  
るか何時大地震動して土中に葬らるゝか何時猛火の荒びに逢ひて  
家財寶物灰燼に化するか何時如何なる災害に遭遇して或は病とな  
り或は死となりて黄土と變ずるやらむ嗚呼亦危うからずや亦悲し  
からずや古之れ等の事を憂ひて舌を噛みて死せし人もありしと聞  
く實に左もありぬべし此の憂ひを誰に向つてか訴へ誰れに向つて  
か號ぶべきや又誰れか之れを療する者ぞ嗚呼尋ね求むれば 神の  
みなり此の 大神を信仰して始めて知る愛護の彌々益々親切懇篤  
なるをこれを知りなは敵の襲ひ來る虞あるも剛勇劍士の身邊を護  
持するが如く聊も憂ふるに及ばぬなり懼るゝに足らぬなり我れ能

く身に自ら覺あり先きに信仰心の薄かりし時以上の事は申も更なり一つの疫を見るも戦々慄々空しく心を痛め加ふるに疴弱多病にてありければ天性好める文學ひせんと欲するも腦軟弱にして其の力學ふに堪へ難く事を爲さんとするも体力及ばず前後を考へこの人生のはかなきを憂ひ佛説の苦界の娑婆と云ふことを最と疾く身に感じ眞に此の世は苦界なりと妄想し世に爲す無きの身を以て恥を見て永く苦まむよりは寧ろ山中に入りて穀食を絶ち死期を早めばやとまで思を廻らせし事屢々なりしが神の御靈の幸を蒙り信仰心彌々起りて益々固まりし以來は恰も夜半四方透間もなく閉ち籠めたる室内に獨坐して氣は鬱々心は悶々として堪へ難き時雨戸を押開きて大道に出て天に輝く最と朗らかなる月を見し時の如く心自ら申々天々として身体も次第に健に趣き悪事災難何のその我身を大神の御守り賜ふからせ世に恐るべき物とて更になし只我信仰の固からざるを恐るゝのみと悟り又大神の尊きことを知りしど共に我心の大切なるを覺え御國の尊きと共に目出度神國なるを感じせり

天地のそきへのきてみまきぬとも

御國にましてよき國あらめや

茲に於て先の愚にも淺ましき考ひを抱きて自ら得手勝手に大神より賦りし我身の生守なる心神を苦しめしを悔え日々大神の御前に罪を謝し人々にも諭す事とはなまにあり凡そ世に立ちて安心なく終始憂るが如きは百萬の富ありて口体を潤すも佛説の生地獄とこそ云ふべけれ假ひ財布の中無一物なりとも心安く憂ひなきは吾天上の高天の原なり早く教の船に打乗りて神を敬ひ道を踏み業を勵みて苦しみの地獄を見捨てし樂みの高天の原に參られて家を齊ひ身を脩め樂くこの世を渡られよ

### 神道天地大教

神道は人道にして畏くも天津御祖の神の立てさせ給へる天地自然の大道なれば人の須臾も離るべき道にあらざるなりこの道天

照大御神に至りて大に備り之れを 皇孫邇々藝命に傳へ邇々藝命より列皇に傳へられたる完美の道教にして彼の外教の如く人意の相像を以て立てし謬誤の道教にあらき故に能く人情に協へ長冗の贅言を用ひずして自然人心善美に趣き上は君に大忠下は父母に大孝を盡し二千五百有余年の 皇統を維持し國小なりと雖も海外強大國の凌侮を受けき反りて其の大國を凌駕しつゝ今日に至れり之れ實に道教の完美にして不忠不孝の臣民なきの致す處なり豈敬はざるべけんや

清鏡未だ若年不省と雖も鎖心正座神代よりの史典を熟讀するに純一の 神教を奉戴し専心 神祇を信仰敬事するの御代には 神明の靈驗顯著にして國豊かに民榮け菑害惡疫の憂へなく人壽も既に數百歳を保ち人心忠實敦厚にして各々其の分を守り苟喩にも萬世一系の 皇位を覬覦するが如き逆徒敢て無りき中古外人と交通を開き随つて種々の道教渡り來りて或は譬諭方便を名として無根の木像に金壁鏤彩して之れを雲表に聳ゆる堂宇に安置し虚妄

誣言を流布し 神祇を輕侮し 神州の正眞なる民心を幻惑し悟を轉して迷の窩窟に陥らしめ淨財と稱して漫りに金錢を貪り其の貪慾縱横至らざるなし其の結果永久尊奉の 神事も勢自然粗略となり如何なる 神の御心にや終に古來稀なる厄疫飢饉人々相食む如き名狀すべからざる慘憎たる苦境此の安樂國に顯出するに至れり次て佛教崇拜の元祖なる馬子の宿禰の如き暴戾豺狼の徒顯れ畏くも 崇峻天皇を逆殺し又妖僧道鏡の如き大逆無道の賊徒出で、宇佐八幡の神刺と詐り連綿たる 皇位を奪はんと企てたり 企て成りたらんには今日萬國無二の 皇統連綿を仰ぎ見る能はず之れと思ひは凡そ日本入種の氣魂ある者如何の感かある嗚呼惜みても猶餘ある賊僧奴賊あり 此の時に至りては殆んど天地自然の國教を度外に放下し恬として更に顧みざるもの、如し嗟呼乎歎けかはしきの極みならずや然りと雖も先に 崇神天皇の如き聰明の人君ありて若し教を受けざるものあらば兵を擧て之れを伐てと詔を天下に布き一人として 神教に服せざる者絶て無きに至りし時の美風末代に遺りて滅せざるにや蠻

教に惑溺するも猶ほ本を忘れず 列皇 神祇を敬ひ総て國艱ある  
 時は 神祇の冥助を祈られたり其の間道の顯晦はあれども其の本  
 を忘れざるは聊か以て 神心を慰むるに足れりと云ふべし牽て明  
 治 天皇に至り數百年の迷夢を一時に攪破し戸田大和守の忠言を  
 容れ聖明英斷佛葬を廢止し日本固有の正嚴なる 神葬に改め賢所  
 を設け 聖上御親ら齊明盛服して嚴肅に 天地神明を鎮祭し給ひ  
 國家萬民の安寧を祈りて一朝一夕も懈怠あらせ給はず以て敬神の  
 模範を垂れ給ひ三條の教憲を發布し教職には階級に依りて判任奏  
 任勅任の待遇を與へ宣敎使として天下に布敎せしめ給ふ此の復古  
 の盛典に依り人々皆敬神の本義を覺り加ふるに清國と交戦の際神  
 變不思議の神驗を實見し彌々神威を畏み永らく潜伏せし日本魂も  
 赫々たる光輝を増し 神教の完美も益々顯れたり眞に雀躍に堪へ  
 ざるなり  
 夫れ事物は總て本末終始あるものにして道教も又然り我 神道は  
 天地の根底本元にして諸道は皆枝葉なり根本を棄て 枝葉に趨か

ば本末秩序を顛倒するを以て 天地の神理に悖戻し不孝不運の淵  
 に身を沈むことを免れず太古 伊邪那岐 伊邪那美の二祖過て本  
 末前後の順序に背き不祥の御子を産せ賜へるを以て昭々たり吾人  
 の爲す業も本の一を過つ時は何事も成功を見るを得ず譬ば砲銃の  
 筒本秋毫と雖も違ふ時は決して標的に命中する能はざるが如し深  
 く鑑み厚く慎まざるべけんや  
 吾大神は 天地萬物を造化し賜ふ大元の主神にましまして道は諸  
 道の根元なり根元は本來一つにして二つあるものにあらず世界一  
 切の萬有釋伽耶蘇孔子と雖も皆 吾大神の靈化に依りて生れ又其  
 の道も我 神道の一部を握りて説き示したるものにしてあれは儒  
 教佛敎耶蘇敎と名稱敎義の法方に差別はあるも根本より生きたる  
 枝葉の變相なれば歸着する處皆一源にあり故に 諸神諸佛の功德  
 は悉く 吾大神の靈徳の内において聊も漏るゝ事無く落つる事な  
 し此の靈徳たるや鴻大無邊にして之れを放ては 天地間の森羅萬  
 像 諸神諸佛に彌り之れを卷け専ら 吾大神の靈徳の一つに歸

す古語に所謂萬法一心より出で、又一心に歸ると云ふ所以なり豈に尊み敬はざるへけんや

枝葉の蕃殖は根本の培養にあり枝葉をの如何に潤澤するも根本の培養を怠らば森々たる大枝大葉も忽ち枯枝枯葉と變ず本元の主神を敬拜すれば未枝の神佛に普く通達し其の程々に冥護あり然るを根元の主神を去りて枝葉の神佛を尊祭するも何の功能か有る之れ實に解し易きの道理ならずや又身の本は心なり千萬の財寶を懷にし錦衣綾裳を身に被り巍々たる樓閣に伏起するも心根一朝錯亂すれば財を失ひ家を滅し妻子眷族四散五離目瞬の間にして街頭に徨ふ貧者となり美食安座以て口体を養ふも心根安寧ならず憂惱の刺戟を受くれば忽ち疾病を發起し亡滅の大災厄降り來りて黄泉の客たらざるを得ず於乎根本の緊切なる事如斯宜なる哉其の本亂れて未治まるものあらじとは記臆せよ家の本を身にあり身の本は心にあり心の本は吾大神なり此の大神と心とを尊敬以て培養すれば無病開運長壽安寧求めずして自左に得られ何の憂苦か

之れあらざるなり之れを之れ蓋し極樂と謂ふべき歟古語に曰く人は一個の小天地なり然り夫れ心は天にして体は地なり兩眼は日月にして氣息は風なり眼を開けは白晝にして閉づれば夜なり毛は草木にして腹は大海胸は原野なり血は地中の水の如し以上數多ければ茲に畧す然らば吾人は即ち天地大神にして天地大神は即ち吾身なりと云ふも敢て不可なきなり而して此の四支五骸の活動耳目の聰明を得るは何が故ぞ之れ心魂の靈德にあり又天地日月の運行晝夜四時の循環雲行き雨施して人間萬物を生育するは何者ぞ之れ他無し畏き吾大神の靈德なり是を以て天地大神は大天地の心魂と知るべし小天地の心魂は大天地の心魂より分ち賦りたるものなれば吾人は畏くも天地大神と同心同体なる事瞭然として掌を指すが如し故に能く其の禮祭奉仕をば造次にも顛沛にも深く厚く慥々爾として勤むる時は一念忽ち大神に感通し禱る事には驗あらざるなく天與の幸福を全ふし病苦を癒し無量無邊の神徳を被り身を立て家を興し國を利する事の難からざるや寸毫も疑



ひを容るゝ處なし之れ吾大教の大教たる以所なり大方の諸彦拳々服膺してこの神理を守り迷夢を覺破し末枝人爲の小道小教に迷ひ賜ふ勿れ清鏡謹んで白す

### 天地の神教子善男善女の方々の御心得

一 天地大元の主神を心念敬事して心を一途に歸すべし古語に曰く罪を天に得れば祈る處なしこの天とは大元の主神を指したるなり 大元の主神に座々 大神に背きて枝葉の百萬神佛に祈ることも決して助けなしこれを譬へば 天皇は四千萬人の元主なり故に 元主の天皇に罪せらるれば枝葉の文武百官に向て訴ふるも百官は更に受けざるが如し又これに反して 天皇の愛顧を被る時は百官は更なり四千萬の人々皆其の人々を愛敬するが如く大元の主なる 大神に愛せらるれば百億萬の 神佛悉く徳の隨々に其の人々を愛顧し賜ふなりいざ覺り賜ひ

一本は一つなり二つなし枝葉は數限りなし本は底深くして見ゆべき枝葉は顯れて美事なれば天下の人々翕然として枝葉に趨き枝葉

の美事に繁れるは其の原因根本にあるを知らず隨て根本の尊きを忘れ本末を誤りて罪に入る此を以て天下百億の人心を皆悉く一源に歸せしめて幸福を與へんとするは劣けれども本教の大願なれば希くは本に歸りて枝葉に迷ひ賜ふ勿れ

一 普く天下の人を稱して産子と云ふ産子にして教門に入りし人を神教子と云へて姓名を神前の祈念録に掲げ終身其の人の安全を祈り歸天の後には又冥福を祈りて本教のあらむ限りは怠らぬ之れを神教子に對する一の義務とす神教子は本教を永遠に維持する爲め月々教費二錢を掛繼ぐ事を乞ふ神教子にして奉神文を奉りし人を宣使と云ふ宣使とは此の教を人に傳へ世に施して専ら救生に力を盡す事なり但し宣使には 神事の秘法を傳統す

一 神教子となられし人には鎮魂と云ひて心神を齋ひ祭り其の祭法を脩したる神證を授け受けし時は心神は我身の生神生守なれば何より大切に宮に祭りて信仰敬事する事かくせば心徳輝き心徳輝けば開運無病に自ら至る動すべからざる 神理元則なり之れ

は神教子にのみ授與する事右神證は年兩度の御大祭に清めを脩して祈念する事なり

一 本部の御大祭は毎年一月元日六月廿五日御小祭は毎月一日八日十五日廿五日と定め當日禮典神事を奉行し國家 聖上の萬歳と神教子信者の安寧幸福を祈念す

一 迷ふて獨り決し難き事あらを空しく心を痛めず速に參詣せられよ神慮を取り紹ぎ善惡吉凶を裁斷して本道を示すべし又病氣災難總て凶事ありし時は同ぶく速かに參詣せられよ遠隔の地は書狀にて通知するも差支なしさすれば 神前に祝言を奏して 大神の救を禱るべし心は生神生守なれば何事も早く 大神に取り

一 續りて徒に心を苦ましめ賜ふ勿れ

一 神佛の札守も尊けれごそれよりは心神の生札生守を尊むべし但し御札と云ふものは上古の書に見えねば元は 神の教にはなかりしを平田篤胤翁が云ひしが如く中古佛敎の渡り來りて佛札を賣りて利を設くるを神官の羨みて物せし様なりそれもよけれ

一 一 甚たしきかも今は御初穂の多寡に應じて大となり小となり紙となり木となり醜となり美とどなる一見殆んど商店の賣器に敢て異ならざるが如しこれ豈に 神の御心ならんや佛僧と御札は更なり讀經改名をも御布施の多寡に依りて長短尊卑の別を爲して更に憚らねと之れも同じく彌陀の本願にはあるまじ本願にあ

一 一 佛敎の肉食を爲すなど云ふは衛生に害なり殊に其の教狭くして普く天下に行ふを得ず見よ米の無き國人は如何にすべきや飢えて死するのみ次に妻を持つな夫を迎ふるなど云ふは世を亡ぼすの本なりそは男女交合せねば人種盡きて世の中は草と木と禽と獸との専有物となり果ればなり

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此の教は大車の僧もそれかあらぬか今の僧は魚肉は愚牛馬の肉を嘗めて腹を肥やし妻は愚吉原洲崎之れ果して彌陀の本願か僧其の者の餓鬼心か將た明治の世の心か且つは其れが眞の道か余れは感

一 一 非道と思ふならん

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此

一 一 故に守るべきの教にあらす否木石にあらぬば人には守られぬ無理非道の教あり此

は神教子にのみ授與する事右神證は年兩度の御大祭に清めを脩して祈念する事なり

一 本部の御大祭は毎年一月元日六月廿五日御小祭は毎月一日八日十五日廿五日と定め當日禮典神事を奉行し國家 聖上の萬歳と

神教子信者の安寧幸福を祈念す

一 迷ふて獨り決し難き事あらを空しく心を痛めず速に參詣せられ

よ神慮を取り紹ぎ善惡吉凶を裁斷して本道を示すべし又病氣災

難總て凶事ありし時は同志く速かに參詣せられよ遠隔の地は書

狀にて通知するも差支なしさすれば 神前に祝言を奏して 大

神の救を禱るべし心は生神生守なれば何事も早く 大神に取り

繼りて徒に心を苦ましめ賜ふ勿れ

一 神佛の札守も尊けれごそれよりは心神の生札生守を尊むべし

但し御札と云ふものは上古の書に見えねば元は 神の教にはな

かりしを平田篤胤翁が云ひしが如く中古佛敎の渡り來りて佛札

を賣りて利を設くるを神官の羨みて物せし様なりそれもよけれ

一 甚たしきかも今は御初穂の多寡に應じて大となり小となり紙

となり木となり醜となり美とぞなる一見殆んど商店の賣器に敢

て異ならざるが如しこれ豈に 神の御心ならんや佛僧と御札は

更なり讀經改名をも御布施の多寡に依りて長短尊卑の別を爲し

て更に憚らねど之れも同じく彌陀の本願にはあるまじ本願にあ

らざるものに利益あるべき理はなかるべしあな覺り賜ひ

一 佛敎の肉食を爲すなど云ふは衛生に害なり殊に其の教狭くして

普く天下に行ふを得ず見よ米の無き國人は如何にすべきや飢え

て死するのみ次に妻を持つな夫を迎ふるなど云ふは世を亡ぼす

の本なりそは男女交合せねば人種盡きて世の中は草と木と禽と

獸との專有物となり果ればなり 故に守るべきの教にあらす否木石にあら

ば人には守られぬ無理非道の教あり此

の教は大車の僧も それかあらぬか今の僧は魚肉は愚牛馬の肉を嘗め

て腹を肥やし妻は愚吉原洲崎之れ果して彌陀の本願か僧其の者

の餓鬼心か將た明治の世の心か且つは其れが眞の道か余れは感

ひり人は覺り賜ひ或僧得意の人曰く寺のは妻と云ふにはあらず  
 あれは大黒と云ふものなりと辨解せられたり尤も妻と云ふも大  
 黒と云ふも將た惠比壽と云ふも女と云ふ一の物体の附調なれば  
 素より何れにても更に防げはなけれども其の附調を變ひたりと  
 てそれが爲に女と云ふ物体は變らねば全じく妻なり女なり穴笑  
 止よ世にはかゝる重寶の口を用ゆる事多し心得置かるべし  
 一耶蘇教の一神教の旨意は非中の又非なり此の事物しあれど長け  
 れば後日の別卷の本文に乗する事とす先は迷ふべからず又先  
 に我知人に耶蘇教の牧師あり處用ありて來りし時余れに向ひて  
 美形の女を見し時は木石と思ふべしと教へり其の時は實に最  
 もと信けたれども今や神の正實なる教に入りて見れば人は素  
 より人女は正に女美形は確に美形なるを木石と見よとて守らる  
 べきの教に非らば殊に木石と見ては無人情も甚たしと云ふべし  
 之れ皆同胞なればなり神の教は女は女と見て只迷ふ勿れど何  
 事も正直に教ゆるが神道の特色なり心得置かるべし

一神使白狐を信仰するを耶蘇教にて靈長たる人が獸類を信仰する  
 は日本人愚なりと讒れども讒るが愚なり耳に止むる勿れ此の事  
 も物しあれど長ければ後日の卷とし今は聊か示し置かむ人は素  
 より靈長には相違なければも鼠を捕ふるには猫を信仰せねばな  
 らず夜の盗人を防ぐには犬に依頼せねばならず重荷を背負ふに  
 は馬に願がはねば叶はず穴覺り賜ひ  
 一死んで彌陀の淨土へ行くなご云ふ誣妄の言を信ずまゝ人は神  
 の子にして佛の子にはあらぬなり花落ちて根に歸ると云ひは死  
 なばたらちねの親たる神の根本に歸るなり縁無き遠き印度の國  
 迄儘々行くの理は如何に求むるも無しいさ覺り賜ひ  
 一世に行者と云ふものに神の乗り掛ると云ふを聞きもし見もし  
 て驚くまじ行者に限らず如何なる人にも天地の大神は終始乗  
 り掛りて座々すなを此の御乗り去れば死するものと覺り賜ひ  
 一世に笠森稻荷とやらに禱言するに先つ土の團子を物して奉り其  
 の願の叶ひし時は米の團子に替へて奉ると云ふ事を見て天理教

こやらがかる事に利益のある天理なしと疾く護ると聞きしが利益のあるが反りて天理なりそは神米の團子を強ち慾むにはあらねどもかく様の事までして願ふ志の厚きを感じて、利益を垂れ賜ふなりされご事は賞めたりごも云ひ難し他に工夫も有らば變へて可なり

一 天理教とやらの踊りは面白くして聊か可なりさまご天理王の命ご云ふ神は日本の神典に無し殊に其の十柱の神の話は余れには更に譯らず人は迷ひ賜ふ勿れ

一金光教とやらは地上に唾するを嚴戒するごか云ひご其れにては農人の地上に糞溺を注ぐは如何に聞かまほし口は重寶なるものご聞けを何ごか牽強附會の遁辞も設けあるならんが人々迷ひ賜ふ勿れ

一 トホカミの痰吐きは衛生に害あり殊に神前にて之れを行ふは神に不敬千萬なりこれに就て面白き話あり先きにトホカミの脩行を充分勤めたる人故ありて本教に加入し日々に參詣で、祝

詞を唱ひしに程經て余れに向つて痰を吐かねば心の垢れを祓ふ能はされば神前に痰吐品を置くを赦されたしと乞へり余れ戒めて曰く神を敬ふには湯をあみて垢を去り水をあみて身を清め白衣を着けて仕ふるが余が道なりざるを痰吐品を神前に置きて痰を吐くなごとは以ての外なりそは兎もあれ角もあれ痰を吐けば心の垢れを去るとなれば喘息持ちと肺病持との心は如何に清潔なるや抱腹絶倒にも堪へざる御咄なりと曰へて言止みとなりけり聊か記して參考とす

一 記臆せられよ冠裝束又は白の着物に紫の袴三つ紋の羽織を着たるか神官にはあらぬなり教導職にはあらぬなり頭の毛を剃り落し身に錦の袈裟を纏ひたるが僧侶にはあらぬなり口にアーメンを唱ふるが耶蘇教の牧師にとあらぬなり子の曰くをのみ稱するが儒者にはあらぬなり神の皦然滓まざる正實なる教を守り明々白々道を履んで始て神宮なり教導職なり儒者なり牧師なり釋迦が肉食妻帯無欲無我の嚴戒教則を固く守りて始めて僧侶なり

怪しきかも概ね今の僧侶は肉食妻帯公然人の目をも憚らず人に  
 無欲になれよ無我に至れよと教へながら已れは世利に狂奔し肉  
 体の俗慾に焦心して餓鬼心勃々正に餓鬼道界に墮落しつゝ、施餓  
 鬼法事を行ふことは嗚呼彌々怪し轉た哀れなり又神官にあれ教導  
 職にあれ儒者にあれ牧師にあれ皆負けず劣らざるの穢心汚行あ  
 りこの穢心汚行の神官教職僧侶儒者牧師を總て破教破戒の化者  
 と云ふ 天地の神教子の方々は申も更なり世の善男善女かゝる  
 化者に化かされ賜ふ勿れ  
 一枝葉蔓延度を過し幹根爲めに堪へ難く將に倒れなんとす茲に枝  
 葉を伐切せざれば幹根保ち難し幹根亡ぶれば枝葉も共に枯れ朽  
 ちなんされば枝葉を伐り掃つて幹根を保全するは愚者と雖も猶  
 は雷同する處なり之れ我が枝葉の邪教を打撃して根元の神理を  
 全ふし以て之れを天下に示さんとする所以にして決して他教を  
 譏るの意に出でたるにあらざるなり乞ふ幸いに其れ之れを諒せ  
 よ

信徒諸君に望む

洋の東西を論せず何れの國として教無き國はあらず耶蘇教あり儒  
 教あり佛敎あり夫れ尊王愛國の志氣を喚起するには國教に若くも  
 のなし耶蘇教を信すれば彼の國を慕ひ佛敎を信すれば印度を愛し  
 儒教を信すれば支那を思ふ神教を奉信すれば至仁至慈の 天皇を  
 尊み日の本を愛敬するに至るこれ人情の定則なり國民にして尊皇  
 愛國の正氣振はされば如何程妙籌良策ありと雖も富國強兵期し難  
 し然り即ち國教の盛衰は敷て國家の盛衰に關係を及すものなれば  
 我國教即ち 神道の隆盛は日本國の隆盛にして 神道の衰頽は即  
 ち日本國の衰頽なり茲を思へば國民の義務あるもの宜しく國教を  
 奉信し祭政一致敬神愛國の御聖旨に副へ奉り國家の隆盛を期すべ  
 きなり然るに御聖旨國体の如何國政の美玉尊嚴を覺らず諸蕃の道  
 に惑醉して更に醒めざるものあを之れ憾慨言ふに忍ひざるなり先  
 に澳國の「スターイン」云ふ先生我國の遊學生に貴國は古國なりと聞  
 く定めて古史あるへしと問へるに皆無しと答ふ博士先生大に之を

を怪み後陸軍中將鳥尾子に遇ふて又問ふて曰く貴國は古國なりと  
聞しが古史ありや否や中將答て曰く完全なる神代よりの正史あ  
り云々す時に博士先生嘆じて曰く貴國の人は自國の學を爲さるに  
や先に學生に問へしに無しと答ふ貴國の如き古國にして履歷の古  
史無きのなければ先の學生の言を疑ひ今又閣下に問ふて其の實を  
得て疑團は全く解けたれどもかく日本の人は自國の古史の有無す  
ら知らずして問はれて無しと答ふるが如き國風にては定めて國體  
國教の何にもものたるをも知らざるべしかくは國家を維持す  
る甚た覺束なし云々中將之れを聞て慙歎置く能はざりしと時に中  
將の從者側にありて膝を進めて博士先生に問ふて曰くさらば國家  
を永遠に保全するは如何にすべきやと問けるに先生答て曰く先づ  
國史を讀ましめて國體を知らしめ國教の尊嚴完美を覺らしめてそ  
れに心服せしむるにあり云々せられたり其れより全先生は神道  
の完美を認めて稱賛止まず終に「スターイン」講義を著し日本の國體國  
教を彌々賞賛し神教を法律の範圍内に置きて悉く國民に信奉せ

しむべしとまで説かれたり嗟呼外人すら御國の神典を讀み見て  
かく云ふに要なる我國の人は多く自國の神典等を學はざるに因  
りて國體國教の尊嚴知るに由なく隨て信仰心至りて薄弱にして妄  
りに儒佛の教にのみ迷ひり故に現東京駐紮英國公使アーチスト  
ンサート氏は深く日本の教宗を究め爾後之れが説をなして曰く  
日本人の教宗上の感覺は之れを各國民に比するに頗る淺薄なるも  
のなりと噫嘻心得て可なり抑も敬神の心淺薄の極みとも覺えきは  
明治の初年にして其の結果森文部大臣の事あり次に帝國大學教授  
久米邦武の事あり(明神の威嚴を汚し免職位紀返上を命せられた  
るなり)又第一高等中學校教授内村鑑三の事あり(耶蘇教に酣醉して  
皇威を汚瀆し免職せられぬるなり)此に於て廟堂の諸士始め人々  
神の疎になすまふき事を曉然覺り初むる時に今回の日清交戦に際  
し上 天皇陛下より神職下人民に至るまで一筋に幽冥 神の御祐  
を祈り又天地の齋主清鏡教正も戰端開始以來終局に至るまで日夜  
更に倦怠の色なく齋戒沐浴至誠如神一心打込め敵國降伏兵士の健

全を掛卷も綾に畏き 天地の大神に禱り奉られたりしに穴畏神變  
 不思議の靈妙屢々顯れ 皇國の萬歳を大聲疾呼するの日出度御世  
 こはなれり於茲乎上下一同 神威を畏み敬神の心氣富むるに垂々  
 たり之れより益宣教使たる者は學識德行を脩め祭政一致の勅命を  
 奉戴して誠心正行神理を説き 神徳を發揚し宣教の大任を全ふせ  
 ずんばあるべからず然るに近時無學悖德汚行の教職行者ありて邪  
 說惡風を社界に流し返りて 神威の尊嚴を輕侮し奉信者を惑し其  
 の方向を誤らしむるに至る嗚呼長嘆大息に堪ゆべけんや齋主且に  
 威々焉として大に之れを憂ひ切齒慷慨累歳 神理を搜りて膚撓ま  
 ず難行苦行の功德を以て 神道の真相天津祝詞の太祝詞の 神傳  
 を 神受了得し一大教法を起し邪道邪說を退治し斯の金瓶無疵の  
 正眞なる國教の美玉尊嚴を全ふし奉り普く天下蒼生を迷途より助  
 け救はんとして天地大教の設立を天長に出願なせしに其の教名尊大不  
 穩にして且つ畏くも 天地大神即ち天神地祇は 天皇陛下の御親  
 ら御祭り賜ふ 神祇なれし是れを教祠に鎮祭するは反りて不敬な

り其の外彼れ此れの云々を以て願書一度は却下となり一度は管長  
 預けとなりて躊躇速に御裁可の恩命に接するを得ざれば一時絶望に堪  
 へざる餘り先一心 神明に祈り建議屢々にして精心一到何事不成祈る  
 眞心 神ぞ知る齋主の心願空しからず遂に貫徹し喜び勇みて綾に尊  
 き 天地大神を鎮め祭り齋ひ奉りて誠心正行布教救生に心魂を盡さ  
 れ 神明へ奉仕の行意只ならず敬禮最も厚ければ 大神の大御心  
 に叶へしにや靈妙不思議の 神徳彌々顯れ大御前に參詣て祐助を  
 願ふ益人は漏るゝ者なく罪障滅して病氣平癒心願成就冥護冥助を  
 被ふる事限りなく仰きても猶ほ餘りあり我等も幸にして導を受け  
 教を蒙りて信仰の結果有難き 神祐を戴き拙劣の身を以て恐れな  
 から世話係を依托せられたれば身に餘る譽と心得不省を願み奉之  
 れに應じ慎んで同胞を惟神の大教に誘ひ 神君の御兩恩に聊か報  
 へ奉らんとす希くは天下の諸賢男女最早内地雜居の期も近きにあ  
 れは早く天地大元の神理を神習ひ決して小道小教に惑はず日の本  
 の元の大なる教に依りて無病開運安心立命を求め協心同力國教の



御盛りを斗り國家の爲め蒼生の爲め盡されん事を懇望に堪へざるなり惣代世話係謹て白す

漸次出版目錄

- 綾尊天地大神之辨 神使之辨
- 宮中御大祭之辨 鎮魂祭之辨
- 天地之源理 神事五戒之辨
- 人生之辨 心事十戒之辨
- 教事五戒之辨 神教大戒魂之辨
- 行事十戒之辨 日拜祝詞
- 天地經歌 神言
- 其之外種々

明治卅一年十二月十五日印刷  
全卅一年十二月廿五日出版

定價金二十五錢

東京市深川區仲大工町十七番地

編輯者兼  
發行人

天地大教本部

東京市深川區仲大工町十七番地

右代表者 山口弘常

發行所 天地大教本部

印刷人名子新造

東京市深川區相川町四番地

印刷所 名子活版所

教本費寄附人名標

一金二圓 深川區相川町六番地 神教子 小原 勝子

一金一圓 日本橋區蠟壳町三丁目一番地 神教子 長谷川清吉

一金一圓 日本橋區橋町三丁目十六番地 神教子 遠藤 脩造

一金二圓二十錢 淺草區北三筋町二番地 神教子 津本松五郎

一金十三圓 世話人 十三名

深川區龜住町

話世人 石渡德次郎

京橋區長崎町

同 伊東 峰吉

深川區伊勢崎町

同 關口福次郎

深川區西六間堀町

同 中里安五郎

深川區仲大工町

同 佐藤堅次郎

日本橋區芽場町

同 渡邊平三郎

日本橋區蠣壳町

同 內藤虎三

深川區八名川町

同 平澤重太郎

深川區八名川町

同 榎原佐吉

本所區 林町

同 赤荻章作

本所區 相生町

同 須田豐經

深川區 御舟藏前町

同 山田喜久

伊豆國田方郡伊東久須美

同 內田忠七

